

ヴァザーリ、ペイター、イエイツ.....
— レオナルド・ダ・ヴィンチ《モナ・リザ》をめぐって —

田 辺 清

Vasari, Pater, Yeats.....
— Centering on “Mona Lisa” by Leonardo da Vinci —

Kiyoshi Tanabe

レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci 1452-1519) の《モナ・リザ》(図1) について、伝記作家ジョルジョ・ヴァザーリ (Giorgio Vasari 1511-74) はその『美術家列伝』で顔を中心に綿密に記述しているが、睫毛や眉毛など実際には描かれていない細部についても記されており、ヴァザーリの幼少時にすでにフランスにあったこの肖像画を彼がみていないことを裏づけている(注1)。しかしながら、ヴァザーリによる論評は「フランチェスコ・デル・ジョコンドの妻モナ・リザの肖像...」という言及によって《モナ・リザ》が画題としてひろまり、「赤みがかった唇や頬」といった描写や「楽士らの同席がモデルの表情をなごませた」などのエピソード(注2)が19世紀後半になっても英国のウォルター・ペイター (Walter Pater 1839-94) をはじめとする批評家や文学者の心をとらえつづけた。

ペイターがヴァザーリの『列伝』第二版(1568)出版から400年たった1869年に執筆したエッセイ『レオナルド・ダ・ヴィンチ』のなかで《モナ・リザ》を「海底に眠る永遠の女神」として幻想的に描写したこと(注3)は、芸術至上主義の審美家の行為としてアイルランドの詩人・劇作家オスカー・ワイルド (Oscar Wilde 1854-1900) によって支持されている(注4)。また英国の批評家 A. C. ベンソン (A. C. Benson 1862-1925) はペイターの《モナ・リザ》についての文章全体を「偉業」と讃えている(注5)。そしてワイルド同様アイルランド出身の詩人・劇作家として20世紀前半まで活躍したウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats 1865-1939) も彼の『オクスフォード近代詩選』(1936)の巻頭に、ワイルドがとりあげたペイターの《モナ・リザ》についての幻想的な描写の一節を「自由詩」のかたちで置いている。

WALTER PATER

1839-1894

Mona Lisa

She is older than the rocks among which she sits;

Like the Vampire,
She has been dead many times,
And learned the secrets of the grave;
And has been a diver in deep seas,
And keeps their fallen day about her;
And trafficked for strange webs with Eastern merchants;
And, as Leda
Was the mother of Helen of Troy,
And, as St. Anne,
Was the mother of Mary;
And all this has been to her but as the sound of lyres and flutes,
And lives
Only in the delicacy
With which it has moulded the changing lineaments
And tinged the eyelids and the hands.

(注 6)

[ウォルター・ペイター

1839-1894

モナ・リザ
彼女はまわりの岩より長い時代を生きてきた。
吸血鬼のように
何度となく死を繰り返し、
墓穴の秘密をすっかり身につけてしまったのだ。
深い海に潜っていたこともあって、
海が陥没した日の跡を身にとどめている。
東方のいかがわしい商人相手に、不思議な織物を取り引きしたこともある。
レダとなっては
トロイアのヘレネーの母であり、
聖アンナとなっては
マリアの母であった。
こうした小さいが、彼女にとってはリラや笛の響きのようなものでしかなく、
ただ、繊細な美しさとなって
あの変幻きわまりない顔だちを作り上げ、
瞼や手にほのかに色を添えながら

生きているだけ。

】（注7）

このイエイツによる、本来散文であったものを自由詩に改めるという革命的な試みについては、イエイツと親交もあった英国の美術史家ケネス・クラーク（Kenneth Clark 1903-83）が『マンダリン・イングリッシュ』（1970 注8）や『ウォルター・ペイター』（1977 注9）と題する講演のなかで「ペイターの文のよさを台無しにしてしまった」例として、さきに紹介したワイルドの論評の通俗性ととともに批判している（注10）。ちなみにクラークはペイターの『レオナルド』の「小さな細胞の一つ一つをとおして肉体の内から外にあらわれた美しさ」という記述を「レオナルドの真意をあらわしたみごとなカデンツァ」（注11）と評価するなど彼自身の《モナ・リザ》観にペイターの影響があることを暗に認めている。

なお、やはり英国の詩人・批評家として著名な T. S. エリオット（T. S. Eliot 1888-1965）はエッセイ『散文と韻文』（1921）において、イエイツも引用している箇所を中心にとりあげながら「曖昧模糊とした悪しき詩的散文」（注12）の例としてペイターの「モナ・リザ論」にふれている。したがって、賛否両論を示しながらペイターの『レオナルド・ダ・ヴィンチ』さらにはそのエッセイもふくむ名著『ルネサンス—美術と詩の研究』（1873）の英国の批評史での重要性を我々は認めざるを得ない。

筆者は最近、ペイターが《モナ・リザ》をとりあげた最後の部分にあたる「たしかにリザ夫人は古い幻想の形象化、近代思想の象徴として立っているのかもしれない」（注13）という一文にイエイツとの関連で言及し「古さと近代」という二元性の意義を論じたが（注14）、凡百の言葉では語り尽くせない魅力を《モナ・リザ》が持っていることも当然の事実である。筆者がはじめて《モナ・リザ》と出会ったのは今からちょうど30年前の1974年、東京国立博物館で開催された『モナ・リザ展』であったが、空前の人気をよんだ同展で1分も立ち止まって鑑賞できないという状況にありながら、重ね合わせた手の美しさと背景描写のみごとなさを目に焼き付けたことが筆者自身のその後の研究動向に大きな作用をもたらしている。両手のバランスによってとられた画面の安定性がいわゆる「謎の微笑」を生かし肖像画としての格調を保っていることはこれまで主張してきたとおりである（注15）。

今回、本論文を執筆するにあたってヴァザーリ、ペイターそしてイエイツを中心とした文学者・批評家の眼をとおし、あらためて《モナ・リザ》について考えてきたわけだが、彼らも指摘する「背景描写にみられる幻想性」にこの名画の新たな魅力をみいだしている。そこには制作年代、モデル問題といった今後も議論の余地のある美術史上の諸問題を越えたこの作品の普遍性があり、永遠に人々の心をとらえて離さない存在でありつづけよう。今年の4月末に、《モナ・リザ》の本格的な科学調査が近くフランスで行なわれるという旨が報じられた。制作から500年、この世界的財産の本質のさらなる解明が期待される。

- (注1) *Le Opere di Giorgio Vasari con nuove annotazioni e commenti Gaetano Milanesi*, Firenze, 1973, Vol. IV, pp. 39-40 (参照)『ヴァザーリ美術家伝 レオナルド・ダ・ヴィンチ伝』(裾分一弘訳), 岩崎美術社, 1974, pp. 25-6 (裾分「あとがき」)
- (注2) *Le Opere di Giorgio Vasari.....*, p. 40
- (注3) H. Bloom (ed), *Selected Writings of Walter Pater*, New York, 1974, pp. 45-6
(参照) ペイター『ルネサンス—美術と詩の研究—』(富士川義之訳), 白水Uブックス, 2004, pp. 127-8
- (注4) Wilde, *Intentions*, 1891 : A. R. Turner, *Inventing Leonardo*, New York, 1993, pp. 128-9 (参照) A. R. ターナー『レオナルド神話を創る—「万能の天才」とヨーロッパ精神—』(友利修・下野隆生訳), 白揚社, 1997, pp. 166-8 ; 本田錦一郎『ヨーロッパの文化とケルト—学問を野に放つ試み—』, 松柏社, 2004, p. 153
- (注5) ベンソン『ウォルター・ペイター』(原著1906 : 伊藤勲訳), 沖積舎, 2003, p. 62
- (注6) Turner, *op. cit.*, pp. 130-1
- (注7) ターナー (友利・下野訳), 前掲書, pp. 169-70
- (注8) Clark, “Mandarin English” in *Moments of Vision & Other Essays*, New York, 1981, pp. 143-159 (特に p. 153)
- (注9) Clark, “Walter Pater” in *Moments of.....* pp. 130-142 (特に p. 135)
- (注10) *Ibid.*, p. 153 (参照) クラーク『視覚の瞬間』(北條文緒訳), 法政大学出版局, 1984, p. 238
- (注11) Clark, *Leonardo da Vinci*, Cambridge, 1939, p. 118
- (注12) 富士川義之「モナ・リザのあと—詩と散文のあいだ—」(1979), 富士川『風景の詩学』(白水社, 2004, pp. 168-70) 所収
- (注13) ペイター (富士川訳), 前掲書, p. 129
- (注14) 拙論「W. B. イエイツとレオナルド・ダ・ヴィンチ」, 『成城文藝』第188号 (2004. 9), pp. 36-41
- (注15) 拙論「レオナルド・ダ・ヴィンチ《白貂を抱く貴婦人》(《チェチリア・ガッレラーニの肖像》) について」, 『大東文化大学紀要』〈人文科学〉第41号 (2003), p. 22

(2004年 9 月10日受理)



(図1) レオナルド・ダ・ヴィンチ (1452-1519)

《モナ・リザ》1503-5 油彩・板

77×53cm パリ、ルーヴル美術館